

エフレーモフの世界と教育

—現代のユートピア思想と教育についての覚書—

児 嶋 文 寿

Efremov's World View and His Educational Thought

—Notes on the Modern Utopia Thought and Education—

Fumitoshi KOJIMA

I. A. Efremov was a Soviet Russian writer and paleontologist. In his science fiction and social-philosophical novel *The Andromeda Nebula*, he described the picture of the future Utopia world.

The Utopia has usually its educational system, he also thought it as a important factor of the social system. Efremov's Utopia and its educational system are his summary of the traditional thoughts of the Utopia and his world view.

序

ソビエトの著名な古生物学者であり、かつその分野の学問研究の第一線を退いてからは、SF小説の分野での中心的存在となったИ. А. Эфремов¹⁾は、彼の代表的作品『アンドロメダ星雲』²⁾において、高度に発展した未来の人間社会を描き出した。『アンドロメダ星雲』は、社会的、哲学的作品でもあるといわれるように、彼はそこで、多くの人間や社会に関する問題を提起した。小論は、それらの問題を、人間の教育という観点から検討するための手続きとして、その社会像と教育像、そして、それを生みだした思想的基盤を明らかにしようとするものである³⁾。

現代のユートピア構想を生む条件をもつものとしては、SF小説として総称される空想科学小説の類がもっともかなっていると思われる。だが西欧を中心とするSF小説に描かれる未来社会⁴⁾は、そのほとんどが、反ユートピアの性格をもち、世紀末といわれるベンミスティックな現状を反映してか、現代社会への不安、失望そして、その上に立つ批判しか提起していない。そのようななかで、エフレーモフは、理想社会を、人間の理性とそれが生み出す科学・技術の発達に限りない信頼をもち、楽天的にかつ、確信をもって描き出した。彼の代表作『アンドロメダ星雲』は、唯一といっている、現代のユートピア思想である。ところで現代において、ユートピアの思

想が思想として成立しがたいのには、それなりの事情がある。トマス・モア以来の伝統的ユートピア思想は、資本主義社会・資本主義体制に対する批判と改革の要求であった⁵⁾。伝統をなしてきたそれらの改革の要求は、その後、科学的社会主義の創始者達により、そのような理想的社会をめざす理論のうちに、解決の青写真を与えられたからである⁶⁾。伝統的なユートピア思想は、その成立の基盤を失ったといわねばならない。

だが、これらのユートピア思想が、近代思想の初めにかかげた理想的な社会状態についての空想的描写が、「空想から科学」への道をたどり、長く民衆の支持をえ、彼等の運動のなかに理想として引きつがれ、実現への青写真を導いたとすれば、現代のユートピア思想は、伝統的なものにかわる、質的に新しい理想をかかげ、かつ新しい性格を備えたものでなければならぬであろう。そのような質的に変化したユートピアは、再びユートピア思想の意義を獲得しうるのである。

田村⁷⁾は、その著『ユートピアと食生活』のなかで、エフレーモフの『アンドロメダ星雲』をとりあげている。そして、他にみられない特徴として、彼のユートピアは、けっして完成し、安定した社会として描かれていないことをあげている。ユートピアの思想は、そのほとんどすべてが、進歩や変化に対しては否定的であるが、エフレーモフは、時間を敵視せず、それを味方としているのである。だが彼は、自然主義者でもなく、単純な科学技術

万能主義でもなく、また社会組織の進歩がすべてに優先するという便宜的な考え方をもっているわけではない。時間の経過のなかで、彼のユートピアは、徐々に、実現されていくのである。

木々と福島⁹⁾は、科学小説を説明しながら、ウェルズが、やがて科学の未来、科学の進歩、発展に伴う社会生活の変遷、道徳の変化、人類の進化などの問題が、この分野の小説の中心課題となることを見抜き実績をあげたことを評価し、そのような方向での発展を、このジャンルの課題としている。エフレーモフの『アンドロメダ星雲』や、他の作品にみられるモチーフは、まさにそのようなものであり、先の田村氏もいうように、それらのなかで、「未来の人間の理想」に取り組んでいるのである。

『アンドロメダ星雲』は、筆者自身がのべているように、先に述べた西欧を中心とする多くのベジミスティックなSF小説に対して、「純粋に論争的」な執筆の動機をもっており、それらに、彼の未来についての考え方を対置したものである。

伝統的なユートピアの理想を実現する青写真を社会的・現実的な手段と共にもちつ社会体制に身を置く人間が、時を味方とし、科学小説の本来のジャンルの課題にそい、しかも、論争的に描き出したユートピアとその思想的基盤を明らかにすることは、現代のユートピアを考えるうえで興味深いことである。

さらに、衆知のように、いままでのユートピア構想は、ほとんどすべてが、その社会における教育の構想をもっている⁹⁾。なぜならば、ユートピア社会の教育は、理想的な社会体制が、それによってよき人間性を再生するゆえに再生産できるという主張の保障であり、従って、教育による人間の再生産は、いわばユートピアを実現する鍵だからである。従って、ユートピア思想は、常にその社会の必須の構成部分として教育の制度をもっているのである。その意味でユートピアは、教育のユートピアであり、子どもにとってもその教育はユートピアでなければならない。現代のユートピアの灯は、伝統的なものがそうであったように、教育の未来にかかわる課題を、再び掲げるにちがいない。元来、教育という営為自身、ユートピアの性格をもつものである。

—

序でもふれたように、『アンドロメダ星雲』を書く動機を、エフレーモフは、それが純粋に論争的なものであったと述べている。

「当時、わたしは、現代の西欧の、それも主としてアメリカのSFを20冊近くもたてつづけに読んだ。その結果、わたしは未来についての自分の考えを述べ、自分の

考える未来を文学のなかに描き出して、哲学的にも科学的にも根拠薄弱なそれらの本の未来観を対置させたいというはっきりした欲求を執拗に感ずるようになった。」¹⁰⁾

こうして、彼は、宇宙戦争の結果としての人類の滅亡、あるいは、未来数万年にわたって資本主義が銀河系全体をおおいつくすというテーマをもつ多くのSFに、「さまざまな宇宙文明間の友好的な接触という考え」¹¹⁾を対置して論争をいどむ。このような創作の動機が、彼の作品を、単なる娯楽読物から区別し、社会的、哲学的な問題を提起するものとしているが、そこで対置されている人類の数千年後の未来社会は、どのようなものであろうか。

エフレーモフは、この作品のなかに、若い女性の歴史学者ヴェーダ・コングを登場させて、そこに至るまでの人間の歴史を説明している。まとめるとそれは次のようになる。(番号は筆者が便宜的につけた。また()内は、明白に書かれてはいないが、文脈より予想されるものである。)

1. 「世界分離時代」

古代、中世暗黒時代、資本主義時代、(社会主義時代、共産主義時代)

2. 「世界再結合時代」

世界連邦期、多言語期、エネルギー統合期、共通語創造期

3. 「全般的労働時代」

物品単純化時代、改造時代、第一次潤沢時代、宇宙時代

4. 「大宇宙連合時代」

各々の時代について、概要を以下に述べる。

1. 「世界分離時代」、この時代の末期に人類は、彼等の不幸のみならず、大昔から自然発生的に形成されてきた社会の仕組みにあること、人類の未来のすべては労働にあること、抑圧から解放された人間達の一致団結にあること、科学と科学的基礎に立った社会の再編成にあることを理解するに至る。そして世界全体、古い資本主義国家群と新しい社会主義国家群との経済体制を異にする二つの陣営にわれ、原子力の開発と古い体制を擁護しようとする人びとのために、人類全体が破滅の淵に追いかまれかけた。その後、窮極において新しい社会体制は勝利するが、それは社会意識の養成が立遅れたためかなりとどこおった。しかし、この体制は、様々の、特に思想闘争の、またその過程での間違い等の困難を乗り越え、着実に地球全体に広がり、やがて、すべての民族や人種が単一の友情にあふれる知的な家族に結合する。

2. 「世界再結合時代」、社会発展のテンポがますます速くなって、自然に対する人間の権力が急速に増大する。

人びとは、労働が自然との絶え間ない闘いや、困難の克服や、科学や経済等の新しい問題の解決と同じように幸福そのものであることを理解するようになる。サイバネティックスの発展、および個人個人の体育（физическое воспитание）の向上によって、人間は職業の変更がたやすくできるようになり、他の専門をすばやく身につけて、労働活動に無限の多様性をもたせ、労働のなかにますます多くの喜びを見出すことができるようになる。芸術が社会による教育（общественного воспитания）と生活組織の分野で非常に大きな役割を果たすようになる。

3. 「全般的労働時代」、人類史のなかで、もっとも輝やかしい時代。電気を濃縮化する方法が発明され、巨大な容量をもつ蓄電装置と、小型ながら強力な電気モーターが開発され、大規模な技術革命がもたらされた。人間の日常生活品を単純化することが行われる。地球の居住地帯と工業地帯にはじまる全面的な配置がえが行われる。両極の水冠を溶かし、亜熱帯地域が二倍に拡大される。地球の30度の緯線に沿って都市居住地域が、北半球のその北側には、牧草地とステップが広がり、無数の家畜が放牧される。北半球の居住地帯の南部と南半球の居住地帯の北部は、すべて公園とされる。熱帯地方では、植物性食品および木材の生産を行う。また螺旋鉄道が地球全体をとりまき、海峡に巨大な橋がかけられ、あらゆる大陸がつながられる。

4. 「大宇宙連合時代」、人類の歴史上での新しい時代、平行光束を利用することによって、宇宙全体と恒常的に連結をたもつことが可能となる。映像受信の発達により、地球と違った道をたどりながらも思考の発展の水準の点で、人間と同じ程度に発達した理性生物のいる他の惑星からの放送をキャッチし、空間と時間にへだてられながらも、理性による偉大な力の連合に地球も結ばれる。

ヴェーダの語る地球人類の歴史は、分離の時代を経て人類が再結合し、宇宙の他の理性的生物と連合し、人類の歴史での新しい時代に入るといものである。

エフレーモフがヴェーダに語らせた歴史の道筋のなかに、多くの過去のユートピア思想家が提起した、社会制度の問題、労働の問題が解決されているのを見ることができ。

なお、このような世界を統括する政治的組織については詳しくふれられていないが、ふれられている限りで下記に記す。

最高中枢は、人間の生存の唯一の現実的な基礎である経済をつかさどる「経済委員会」であり、委員会は、その諮問機関として、人間の幸福の総和を増大させることを目的とする「悲しみと喜びのアカデミー」、そして、「生産アカデミー」、「未来予告アカデミー」、「労働精神生理

学アカデミー」（労働を変更し選択するための「職業紹介ステーション」は、このもとにある。）等をもっている。他に「極限知識アカデミー」、「《名誉と権利》擁護委員会」があり、そして、傍系として「宇宙委員会」が、「指向放射アカデミー」と「大宇宙連合対外ステーション」をもち、宇宙への人間の活動と大宇宙連合との交渉にたずさわっている。

さて、自然発生的な社会の組織を克服し、世界連邦を達成、共通語を創造し、大宇宙連合の一員として、経済委員会の抑制のもとに、他の宇宙文明との直接の接触を志す時代の人びとの人間像は、どのように構想されているのだろうか。「美は、構造の合目的性、つまり一定の使命に対応する適応が本能的に知覚されたものなのだ。したがって使命が多面的であればあるほど、形は美しくなる。」¹²⁾と考えるエフレーモフにあっては、未来の人間は疑いもなく調和のとれた人間である。未来の人間は、緊張を要する知的労働に従事せざるをえないため、さらに力強く、さらに大きくなり、美しくなる。女性たちも、社会の構成員として、圧迫や権利の制限から完全に解放されているため、感情を表明することにおいても完全に自由となる。人間たちは、いつもそれぞれにとって興味深い仕事に熱中したり、多面的な知的活動や肉体的活動に従事するようになり、その生活は、時間がたりなくて困るぐらい充実したものと考えると考えられている。

以上のエフレーモフの将来の社会についての描写は、ヴェーダの語る第一の時代の例をあげるまでもなく、明白に科学的社会主義の創始者の立場にたつ予想（測）であることは明らかである。第1の時代以降の発展の歴史が、どのような螺旋状の道をたどっているのか例証することは難かしいが、「世界分離時代」と「世界再結合時代」の区分は、興味あるものと言わねばならない。

科学的社会主義の創始者達も、ヴェーダ・コングのいうように共産主義のもとで、はじめて人間は自然と社会の完全な意味での意識的な支配者となりうることを述べた。だが彼等も、その社会体制を人類発展の最終目標としたわけではなかった。「共産主義はもっとも近い将来の必然的形態であり、エネルギーな原理 [das energische Prinzip] である。しかし共産主義は、そのようなものとして、人間の発展の到達目標——人間的な社会の形姿ではない。」¹³⁾すなわち、人間の社会の自然史的過程のとりあえずの終了であり、それは、人間の意識的な歴史の「本史」¹⁴⁾のはじまりにすぎないのである。エフレーモフの描く第2の時代以後の歴史こそが、実は人類が「必然性の国」から「自由の国へ」¹⁵⁾の道をたどる、人類の歴史の本史なのであり、新たな真実の歴史の出発点以後の社会の道程の予想であり、彼のユートピアなのである。

この世に存在するものは、すべて螺旋状の道をたどって進歩し発展する。そして、それは生命と人間社会の発展に適応しようとするエフレーモフの自然科学者としての実証的確信と社会科学の結合を見ることが出来る。

二

他のユートピアと同様に、「大宇宙連合」時代の地球人は、教育にたいして、きわめて深い関心を持ち、配慮をおこたらない。

科学的な仕組みを持つ完全な社会形態は、単に生産力の量的な蓄積だけで達成することはできない、質的に新しい段階なのである。そして新しい社会関係は、新しい社会を抜きにして新しい人間が考えられないのと同様に新しい人間を抜きにしては考えられない。従って人間と社会全体の発達には相関関係があり、各々の人間がその社会の構成要素として精神的環境を高めれば、社会もまた人間を高める。従って社会の運命は、その社会を形成している人びととできまるし、社会は、経済構造とともに、その社会の構成員の道徳的・思想的発展をそのままあらわすものである。従って、人間の教育と、人間の精神的・肉体的発達は社会の主要な任務なのである。

このような社会の進歩と人間の発達の弁証法的な関係の理解のうえに、この時代には、各人のもつ欠陥は遺伝的なもの、あるいは生得的なものとして片付けられたり、人間の育成や教育が無計画になされた歴史的な経験が克服され、特別な訓練を受け、特別に選び出された教育者たちの集団が、その社会にふさわしい人間をつくり出すことに努力している。母親達は、世界中の人びとが自分の子どもを可愛がってくれるということを知っており、気遣いじみた母性愛は見当らない。さらに、素行の悪い人間があらわれれば、それは社会全体の欠陥、それを生み出した社会集団の重大な失敗とみなされる。このように、この社会においては、教育は、社会の主要な活動の一つであり、かつその意味でも共同の大事業なのである。

この時代の子ども達のための学校制度とそれをとりまく社会の教育的システムを、学校についての部分的描写をたどりながら、次にみてみよう。

学校制度

第0期学校 1歳～5歳

第I期学校 5歳～9歳

第II期学校 9歳～13歳

第III期学校 13歳～17歳

ヘルクレスの偉業
(3年間) 中等教育を終了する条件の一つとして、大人にまじって働きながら、12の課題を遂行し、自分の興味と才能がどのようなものか最終的に知る。12の課

題をなしとげたものは、高等教育機関にはいる資格を与えられる。

高等教育 (2年間) この教育を終了すれば、自分の選んだ分野で自主的に研究する権利をえる。
(5つないし6種の高等教育を受けることができる。)

学校制度は、以上のように考えられるが(予想の部分を含む、部分的描写から筆者が再構成した。)、この学校の教育には、社会の成員全体が並行して、参加・関与するシステムをもっている。

大人は、「ヘルクレスの偉業」の指導教官(先輩の助言者)の役割を果たすことになっているし、第III期の学校教育を受けている生徒達は、第I、II期の生徒の勉強やしつけの面倒をみることになっている。

さらに、子ども達は、すべて海岸で育てられることになっており、学校は、北半球の海岸に設置されている。子どもは、各々の期毎に別の場所で勉強できるよう、他の場所に移動する。これは、自然に対する感情をつちかい、自然との繊細な交流を深めさせるためであり、生徒達の感覚の低下を防ぎ、知覚を鋭くし、教育効果をあげるための配慮でもある。

授業は、天候が良ければ、通常草原の木立の下で行われ、教育内容は、たえず新しいものを捨てて、いつも一番新しいものを生徒に与えるようにされている。

そして、どの期の学校も、普通の学科の授業は、労働の授業と交互に行われることになっている。具体的な例として、「光学ガラスの研磨」をみることが出来る。

歴史や地理の授業も労働と結びつけられて総合的に学習されている。生徒達は、石器時代の人びとを真似て、その時代の斧を使い、船をつくっている。計画では、夏休みに、その船を使いカルタゴの遺跡を見学しに行くことになっている。

矢川¹⁶⁾は、トーマス・モアの『ユートピア』を分析しながら「ユートピア的教育の三原則」を労働をとおしての人格形成という理念を主軸として、①. 教育実践の面では、知識・技術の教授と労働実践の結合、②. 教育制度の面では全児童が就学する公教育と職業の自由選択の結合、③. 社会体制の面では、私有財産制の廃止、と定式化している。

これらのユートピア的教育の理念は、近代教育思想史の初めの時期に、「現代教育の課題の灯」¹⁷⁾をかかげたものであるが、これらの原則は、その後の労働者の運動や社会思想のなかで、労働者の教育要求の理念¹⁸⁾として受けつがれ、ロシア革命の後のソビエトにおいて、現実的な実践的課題¹⁹⁾として、日程にのぼったものである。先に述べたエフレーモフのユートピア的教育も、そのような

ユートピア思想の灯とその後の伝統を受けついで教育構想であることは明らかであろう。すべての人々の職業の自由選択との連結、社会体制の件については、すでに前節でふれたとおり実現されている。

この三原則が実践の課題となったロシア革命の時期、H. K. クルプスカヤは、「社会主義的学校の問題によせて」²⁰⁾(1918年)で、資本主義社会の学校の階級的教育を批判して、社会主義社会の学校の目標と役割について、次のようにのべてた。

「意識的で組織的な社会的本能をもち、全一的なよく考えぬかれた世界観をもち、周囲や社会生活のなかで生起するすべてのことをはっきり理解できる全面的に発達した人間の教育、肉体的労働にも精神的労働にも、あらゆる種類の労働にたいして理論のうえでも実践のうえでも準備されており、合理的な、内容豊かな、美しく楽しい社会生活を建設することのできる人間の教育である。社会主義社会にはこのような人間が必要である。こういう人間がいなければ社会主義社会は完全には実現しえない。」

クルプスカヤは、このように、社会主義社会での学校、教育の目的を定式化するとともに現実的な社会建設のうえで教育の果す役割について述べ、社会発展と人間の全面的発達との相互関係を、具体的な状況のなかで明らかにし、さらに、国民の、社会の共同事業としての国民教育を強調したのである。

エフレーモフは、未来社会を考えれば考えるほど、この思想の意味を強調しているかのようにみえる。従って「大宇宙連合」時代の子ども達は、社会の未来を担う、最大の財産として、暖い配慮のもとで充実した教育を受けるのである。自然と子ども、人間のふれあいの重要性についての教育的配慮は、彼の独断場である。そして、労働の授業と普通の授業が交互に行われる形態での労働と教授の結合、さらに、「ヘルクレスの偉業」や総合学習的な「カルタゴの遺跡」の手製の船による見学等は、いわゆるポリテフニズム(総合技術教育)や、その一環とも考えられる社会的有用活動、学校と実生活の結合の強化等の思想や実践のエフレーモフによる継承・発展であり文学的形象化である。エフレーモフのユートピア社会での教育構想は、ユートピア思想の伝統を受けつぎ、さらにソビエトでのその理論や実践についての自分なりの総括のうえに、構築されたものである。

三

エフレーモフは、『アンドロメダ星雲』の直接の続編ともいべき、『蛇座の心臓』²¹⁾を2年後に書いている。前作では、依然として未来の目標として残されていた他の宇

宙人との直接的な接触をテーマとしている。

彼は、この作品の執筆意図を、自分の中心的思想を最後まで語りたかったとのべているが、それは、「遠い世界からきた理性生物同志の宇宙での出合いは、決して偶然的な現象ではなくて、それぞれの理性生物の歩んできた歴史の一種独特な総括」²²⁾であるとのべている。彼の考え方からいえば、これらの両者の出合いを可能とする双方の文明は、科学技術の面でも、社会発展の面でも、巨大な成果をあげ、両者の世界は、社会発展の高度な段階を達成していなければならない。とすればそれを可能とした理性生物は、理性の面でも、兄弟の関係に近しい者同志である。

『アンドロメダ星雲』においても、他の理性生物の住む惑星から送られてきた通信、映像についての描写がある。そこに写しだされた人びとは、地球の人類に類似している。エフレーモフの人間の未来についての思想は、この理性的生物同志の友好的な、そして兄弟に近い関係にあるものの出合いの場面に象徴されている。それは、彼の生命の歴史、理性生物の歴史と未来についての独自の解釈の総括なのでもある。

このような楽天的な、理想的な人間や宇宙についての彼の思想や総括の根拠は、「美」についての彼の思想を通して、伺うことができる。エフレーモフは、『アンドロメダ星雲』執筆の7年後、自身で実験的なもの、未来の文学への最初の試みと称した作品『かみそりの刃』²³⁾の主人公、精神分析医ギーリンが、小説のなかで表明する美についての思想で、それを明らかにしている。

この小説は、女性美の解釈にはじまり、美の本質、人間の美意識の解明にまで、「美」についてのギーリンの追究はおよぶが、主人公を通して、エフレーモフは、美は客観的実在として存在しているものであるとして、芸術や芸術理論のなかの観念的な考え方を否定し、芸術を、科学的な規定を使って、誰にでもわかる一般的な言葉で説明することができるようにすることを提案する。一般的な言葉での彼の美と人間の美意識についての解釈は次のようになる。

- ①. 美とは、あらゆる機会、あらゆる事物、あらゆる有機体のもつ合目的性の最高の段階であり、それらの矛盾的諸要素の調和的統一、調和的結合の最高段階である。
- ②. したがって、美しい線、美しい形、美しい組み合わせは、数百万年にわたる自然淘汰の結果、自然によって成し遂げられた合目的の解釈であるか、あるいは美的なものの探究(すなわち、ある事物にとってのもっともふさわしい形態の探究)の過程で人間が発見した合目的性の解釈である。

③. 人間にとっては、美の把握は本能的なものとして以外に考えることはできない。美の把握は、人類の数十億年という長い世代の無意識的な経験および数千年の世代の自覚的な経験により人間の意識下の記憶のなかに定着したものである。(ちなみに、女性美も、われわれに先立つ人類の各世代が生存競争および種の存続にとってより安定したもの、より万能なもの、より有利なものを選び出す努力のなかで獲得した経験、その経験がわれわれの潜在意識のなかに凝縮したものである。)

④. われわれの美に対する感覚、意識は、すべて潜在意識の奥深いところにその基礎をもち、それが思考の過程で浮び上がってきて意識と接触し、はっきりとした理解となり、心理に反映する。

⑤. さらに、人間の遺伝の機構は、新しい人間を創り出すために必要なあらゆる情報を担っているだけでなく、本能や脳の意識下の働きという形で、過去の世代の記憶をも担っている。

以上の美についての主張(仮説)は、飯田²⁴⁾のいうように、「思想の根幹にあるものは、数億年にわたる地球上の生命の進化の歴史であり、生命が環境への適応を軸にし、絶えまない困難の克服を通じて、より高度な適応を達成してきたという認識である。そこには、古生物学者としての長い間地球の歴史、地球上の生命の歴史に具体的に取り組んできた作者エフレーモフの目」が確かに認められ、人間の進化に至るまでの数十億年の生命の歴史とそれに裏づけられた、数千年後の人間の社会への発展的な見通し、楽天的な確信は、重みを持って、われわれにせまるのである。

このような美一合目的性に向うすべてのものの合理的解決一についての、とりわけ人類の発展についてのエフレーモフの確信は、ゆるぎないものである。従って、その総括は、同様な発展をたどるにちがいない。そして、理性においても、様姿においても、地球人と兄弟のような、他の理性生物との出会いなのである。

さて、視点を、彼がこの小説の目的としたもう一つの面に向けたい。彼は、この小説の目的を人間の心理的本質を認識することが、将来の人間教育の科学的基礎を作るうえに、いかに重要であるかを示すことであると述べている。彼が未来の社会を考えるうえで、いかに人間の教育を重要な事と考えていたかは先にも示した。だが、人間の心理的本質を認識することについての、また、人間の教育を考えるうえでの、美や美意識についての着目や深い関心は、(美についての彼の仮説の独自性や、小説でのその実証の過程を一旦、考慮の外におくとしても)、ソビエト＝ロシアの社会思想や芸術、教育の歴史をふり

かえる時、必ずしも彼独自のものではないことに気づく。

ソビエト＝ロシアの社会思想や芸術や教育の思想の歴史と伝統のなかに、人間の現実に対する美的対応を追い求めた歴史をみることは、それほど困難なことではない。その伝統の解明は他にゆずるとして²⁵⁾、例えば、ソビエトの教育(学)²⁶⁾は、子どもの全面的発達を培う領域として、知育、徳育、体育、総合技術教育、労働教育とともに、切りはなせない部分として、自然と社会、人間相互の関係のなかにある美を理解できるようになることを目的とする美育をしっかりと位置づけている。

さらに、そのような全面的に発達した人間なしでは形成されない共産主義社会は、「国民の根本的生活要求の充足を保証することによって、たえず自分の美感覚を發展させ、現実に存在する美を無制限に享受し、美の法則に従って世界を変革するという可能性を国民に与える。」²⁷⁾ものとして考えられている。エフレーモフは、このような国の思想・芸術・教育の伝統のすぐれた継承者なのもある。

四

遠い未来を想定して書かれたわけでもない『かみそりの刃』のなかでも、すでに、エフレーモフは、『アンドロメダ星雲』のなかに数多く登場する未来の美しい人間を示唆している。

小説で中心的存在として活躍するギーリンは、若き精神生理学者・美学者である。そしてヒロインは、美しい体操の教師である。人間の全面的発達の理念であり、またそれを達成する過程である人間の精神的発達と肉体的発達の統一を、彼はこの二人の主要な登場人物に担わせ、各々の美を強調するとともに、両者の精神的結びつきのうちに形象化している。

この人間の精神的発達の素晴らしさの形象、ギーリンに、作者エフレーモフの自画像の一部を感じる時、われわれは、そこに科学者と芸術家の統一した姿、科学と芸術の結合を見出すのである。

科学による自然や社会の理論的認識の積極的役割については、いまさらふれるまでもない。ところで、先にもふれたソビエトの美学は、「わが友よ、理論は灰色だが、しかし、生命の永遠なる樹はみどりだ」²⁸⁾というゲーテのことばを引用しながら、理論的認識について、それは現実のいきいきした多様さが消失してしまう抽象・普遍へと昇華し、それがいかに重要であり必要であろうとも、世界の認識は、そのみに局限されるものではない、とのべている。人間はリアルな個々の事象をそのいきいきとした直接的なものを通じて観察し、意味づけ、評価するという、ゆたかな精神的経験をもたねばならず、その

ようなものの重要な手段が現実にたいする美的関係なのである。美的な意識は、実在する物象を統一的にとらえ、具体的形象をつくり出すのである。すなわち、現実にたいする美的関係は、理論とともに、現実を認識する一つの方法として、それと相補うものである²⁹⁾と位置づけられる。

論旨を再びエフレーモフそのものに向けよう。最初にふれたように、彼は、ソビエトの古生物学界の先進的存在である。アメリカと競い合った古生物(恐竜)の発掘競争で先進的役割を果たした世界的に著名な存在である。また地殻中の古生物の発見に手がかりを与える新しい学問分野、タフォノミア(Тафономия)の創始者であり生物学博士であった。さらにそれ以後の創作活動によりソビエトSF界の中心的存在となった。その代表作『アンドロメダ星雲』が、単にそのプロットや着想の奇抜さからだけではなく、その内容の哲学的、社会的性格からもソビエトを代表する作品として、SF小説といわれる小説のジャンルで世界的に認められているとすれば、われわれは、科学者エフレーモフに、芸術家エフレーモフの評価をも加えなければならない。

『かみそりの刃』で、人間の精神的発達と肉体的発達の統一した美しさを謳いあげたエフレーモフは、自身のうちに、世界についての科学的認識(理性的認識)と芸術的認識(感性的認識)の能力を統一的に発達させていたといわねばならない。

われわれが検討してきた『アンドロメダ星雲』に描かれたユートピアは、このような資質をそなえ、ソビエト＝ロシアの美的伝統を継承した個性による世界の認識であり、人間とそれが創造していく世界の限りない発展への確信の表明であった。

各々の節で解明したように、ユートピアもそこでの教育も、それまでの伝統的理念や理論、そしてその後の発展や実践の先進的部分を継承したものであった。それらの理論的達成や実践的成果を十分にふまえているが故に彼の形象は、現在の時点で、説得力をもちリアルにわれわれにせまるのである。彼のユートピアは、少なくとも、社会制度や教育についていえば、現在に至るまでの理論的成果や実践的達成のうえに立って、今後めざされる方向を示す形象に他ならない。

ユートピア思想という点からのべれば、先にふれた田村や木々・福島の見解は理解できるように思われる。現代のユートピア思想は、彼等の語ったことを欠くことの出来ない条件とするのではないだろうか。いずれにしろ、エフレーモフのユートピアは諸科学の成果とその総括による科学的な現実の認識に加えて、実在の物象を統一的にとらえる現実的な美的認識の結合を提起しているので

ある。

教育学の観点からいえば、彼が、この小説のなかで、文学的形象を通して示した未来の学校と教育、教育に対する社会全体の関心と配慮等、あらためて形象化された教育理念のいくつかは、その実現をめざす、それが可能な条件をつくる実践的活動の指針となるものである。また、精神的発達と肉体的発達の統一、理論的認識と芸術的認識の統一した発達は、全面的に発達した人間の形成の重要な課題として、検討されるべきものであろう。

だが序ですでにふれたように、小論は、エフレーモフの描いた社会と教育についての形象とそれを生み出した思想的基盤を明らかにしたにすぎない。人間の形成・教育という観点からいえば、社会の発展と人間の形成・発達の関係、生産的労働を軸とする人間の全面的発達とそのための労働のあり方・ポリテフニズム(総合技術教育)の総合的理解³⁰⁾、さらに人間の認識活動における美と美的認識の役割等、提起された問題の解明は、今後の課題として残されている。覚書としたのは、エフレーモフが提起した問題を、教育学の立場から明確にする必要性を思ったからである。

現在、われわれが直面しているもっとも重要な核による人類絶滅の危機は、エフレーモフが約30年前に予想していた事態である。エフレーモフは、人間の理性を信頼し、楽天的なその結末を予想した。われわれは、現実に存在する美を確信し、そのような現実に美的に対応しなければならない。

参考文献・(注)

- 1) Иван Антонович Ефремов, 1907-1972.
- 2) Туманность Андромеды, 1957.

作品が書かれた時代について、簡単に付け加えておけば、いわゆるスターリン批判は、この本の出版される前年のソ連邦共産党第20回大会(1956)にはじまる。この出来事が、科学・芸術の諸分野に与えた影響は周知のこととして、芸術の分野でも、いわゆる雪どけにかかる。

教育学の分野では、雑誌ソビエト教育科学誌に巻頭無署名論文「全面的に深く子どもを研究せよ」、Всестроенно и глубоко изучаешь ребенка, Советская Педагогика, no.8, 1956, 「教育学における個人崇拜の結果を克服せよ」、Преодолеть последствия культа Личностей Педагогике, Советская Педагогика, no.9, 1956.が掲載され、それまでの教育学の「子ども不在」が批判され、教育学研究は、新しい時代に入る。

- 3) 鈴木正幸は、その著書、イギリス近代教育思想の源

- 流, 福村出版, 東京, 1985. のなかで, これまでの伝統的な西洋教育史研究において, ユートピア教育思想が正当に評価され, 位置づけられることが十分でなく, 西洋教育史の通史における地位を占めることができないでいる, とのべている。小論も, その趣意に沿うものであるが, 氏の「現代的意味」についての議論には, 現代のユートピア思想という観点から「質的に新しい」ユートピア思想の考えを提起する。
- 4) その例として, 日本でも1984年前後に, 多面的に論ぜられた, George Orwell: Nineteen Eighty-Four, 1949. 訳書, 新庄哲夫訳: 一九八四年, 世界SF全集10, 早川書房, 東京, 1974, Aldous Huxley: Brave New World, 1932. 訳書, 松村達雄訳: すばらしい新世界, 前掲世界SF全集10. 前者では, 「戦争は平和である 自由は屈従である 無知は力である」というスローガンの下に, 人びとは, あらゆる理性, 感情も支配される。後者では, 全人類の幸福を「安定」にあるとし, 大量生産と人間の生活の徹底した管理が行なわれる。そのためには, 子どもは, 生れる数・階級も統制され, 人工孵化により生みだされ, 胎児(?)段階より条件反射により予定された階級にふさわしく育てられる。この著名な二著をあげれば十分であろう。なお, SF小説と総称される空想科学小説におけるユートピアと反ユートピアの教育についてのエフレーモフと同様の視点からの検討は, 後の課題としたい。
- 5) 伊達功: ユートピア思想と現代, 95, 創元社, 大阪, 1971.
- 6) 同上書, 94.
- 7) 田村真八郎: ユートピアと食生活, 214, 222, 社団法人農山漁村文化協会, 東京, 1981.
- 8) 木々高太郎, 福島正実: 科学小説, 世界大百科事典, 5, 270.c, 平凡社, 東京, 1972.
- 9) 福田敏一: 政治社会と教育の立場, 教育学全集, 14, 314-315, 小学館, 東京, 1968.
- 10) Иван Ефремов: На пути к роману «Туманность Андромеды», ИВАН ЕФРЕМОВ сочинения в трех томах, ЗИЛ. 371, молодая гвардия, москва, 1976. (以下, 同選集によるものは, 選集と表示する。なお『アンドロメダ星雲』については, 飯田規和訳: アンドロメダ星雲, 世界SF全集, 22, 早川書房, 東京, 1978. なお後出の『かみそりの刃』については, 飯田規和訳: アレクサンドロスの王冠, 上・下, 東京創元社, 東京, 1979. があり, 引用・訳語等は, それらによっている。なお小論は, それと共に, 氏のエフレーモフの理解に多くの示唆を頂いている。氏の労を多としたい。また訳文については, 若干, 筆者が改訳を試みた部分があるが, それは筆者の責である。)
- 11) 同上書, 371.
- 12) 選集, 3 II, 56.
- 13) マルクス: 経済学・哲学草稿, 城塚登・田中吉六訳, 148, 岩波書店, 東京, 1964.
- 14) 芝田進午: 人間性と人格の理論, 400, 青木書店, 東京, 1969.
- 15) マルクス: 資本論, 第三巻, ペ. エヌ. グルズデフ編・大橋精夫訳: マルクス=エンゲルス教育論2, 57, 明治図書, 東京, 1968.
- 16) 矢川徳光: 労働と教育, 岩波講座, 現代教育学, 4, 近代の教育思想, 159, 岩波書店, 東京, 1961.
- 17) 同上書, 160.
- 18) 例えば, マルクス・エンゲルス: 共産党宣言, 1848. には, 「10. すべての児童に対する無償の公教育。今日おこなわれている形態での児童の工場労働の廃止。教育と物質的生産との結合。その他。」(前掲, 大橋訳教育論1. 178.)
- 19) 例えば, 「ロシア共和国単一労働学校に関する規程」. 1918年. 全口中央委員会承認。「第三条 第一(8歳~13歳(5年制…筆者)および第二(13歳~17歳(4年制…筆者)段階の学校の教育は無償とする。第四条 第一および第二段階の学校への出席は, 就学年齢にあるすべての子どもの義務である。」「第一二条 学校生活の基本は生産労働でなければならない。(中略)生産的労働は, 身のまわりの生活のすべてを知識の光で照らす教授=学習と, 密接有機的に結合されなければならない。また, 生産的労働は, たえず内容を高め, 子どもの生活環境で直接的に把握できるものの範囲からぬけ出すようにして, ありとあらゆる形態の生産を, 最高水準のものにいたるまで, 子どもたちに教えていくものでなければならない。」(以上, 引用. 柴田義松, 川野辺敏編: 資料ソビエト教育学, 486-488, 新読書社, 東京, 1976.)
- 20) クルプスカヤ: 社会主義学校の問題によせて, 同上書, 39.
- 21) Сердце Змеи, 1959, 選集, 2. 邦訳, 袋一平訳: 宇宙翔けるもの, 飯田規和編, 世界のSF(短編集)ソ連東欧篇, 世界SF全集, 9~44, 早川書房, 東京, 1978.
- 22) 選集, 3 II, 56.
- 23) Лезвие Бритвы, 1963, 選集, 31, 邦訳題, アレクサンドロスの王冠, 前掲.
- 24) 飯田規和: アレクサンドロスの王冠について, 前掲書, 下, 554.
- 25) ソビエト科学アカデミー: 世界哲学史, 3, 東京図

書，東京，1959。拙稿：リアリズム文学と教育(-)，名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要，第17集，159-168，名古屋大学教育学部附属中・高等学校，名古屋，1972。

- 26) カイロフ監修・矢川徳光訳：ソビエトの教科書，教育学，I. II. 明治図書，東京，1957。
- 27) ソ連科学アカデミア研究所，蔵原惟人監修，山村房次訳：マルクスレーニン主義美学の基礎，3，781，啓隆閣，東京，1968。
- 28) 同上書，2，340。
- 29) 現実に対する美的関係。芸術の現実認識の役割。芸術的認識，哲学では，感性的認識として議論されるが，この意味と意義については，古典的には，B. N. レーニン：トルストイとプロレタリア闘争。レーニンの文学論，青木書店，東京，1954。教育に関係するものとして，蔵原惟人：文学の教育性はどこから来るか，新しい文学教室，新評論社，東京，1953。をはじめとして多くの議論がある。最近では，村山士郎：戦後生活綴方の理論的課題—矢川徳光の教育理論に学ぶ—，生活綴方実践論，青木書店，東京，1985。にまとめら

れているように，感性的認識と理性的認識は，二つの段階ではなく，たがいに侵透しあっている二つの契機であり，(コージング責任編集。秋間実訳：マルクス主義哲学，下，大月書店，東京.)，これら両契機のどちらを欠いても人間の知識は成立しない。(岩崎允胤・宮原将平：科学的認識の理論，大月書店，東京，1976.)と考えられている。なお，教育学からの史的アプローチは，拙稿：前掲名古屋大学附属中・高等学校紀要論文で，若干試みている。

- 30) この問題についての具体的な状況と考察は，川野辺敏：全面発達と教育—教育と労働の結合を中心に，ソビエト教育の構造，91-119，新読書社，東京，1978。

(文中に使用している社会体制を示す用語は，特別な場合を除き，現にある国・体制をさすものでなく，社会科学上の概念である。小論は，もとは，ある大学でのロシアソビエト教育史(特別講義)のためのメモの一部である。愛着があり手を加えあえて印刷にふした。安易さ，不十分さへの批判は，まぬがれない。)

(受理 昭和61年1月25日)